



# 日本イスパニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第22号 (2015年10月10日) / Núm. 22 (10 de octubre, 2015)

## 事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1  
第2ユニオンビル4F  
(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内  
Tel:03-5981-9824 Fax:03-5981-9852  
e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp  
(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

## 広報委員会編集部

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学文学部 現代文芸論研究室  
柳原孝敦宛  
Tel: 03-5841-0260 (内線)  
e-mail: yanataka@l.u-tokyo.ac.jp

## 目次

【巻頭言】		
寺崎英樹	イデオロギーとしての言語学	2
【エッセイ】		
1. 福嶋教隆	イグナシオ・ボスケ博士 講演 “Los diccionarios combinatorios y el concepto de colocación. Aspectos teóricos y aplicados”	3
2. 木村琢也	フアナ・ヒル・フェルナンデス博士 “Fundamentos fonéticos de la enseñanza de la pronunciación”	5
3. 日本・スペイン・ラテンアメリカ学会 (CANELA) 第27回大会講演報告		6
【書評】		
1. 花方寿行	ベニート・ペレス＝ガルドス 『ドニャ・ペルフェクタ——完璧な婦人』	8
2. 和佐敦子	『スペイン語学概論』	9
3. 四宮瑞枝	『相互文化的能力を育む外国語教育 —グローバル時代の市民性形成をめざして』	10
4. 高際裕哉	ロベルト・ボラーニョ 『アメリカ大陸のナチ文学』	11
5. 柳原孝敦	田尻陽一監修 『現代スペイン演劇選集』 I、II	13
6. 西田依麻	フランシスコ・ウンブラル 『用水路の妖精(ニンフ)たち』	14
7. 斎藤文字	ホルヘ・ボルピ 『クリングゾールをさがして』	15
8. 田尻陽一	『現代スペインの劇作家 アントニオ・ブエロ・バリェホ—独裁政権下の劇作と抵抗』	16
【国際学会報告】		
1. 村上陽子	ASELE 第25回大会	18
2. 大楠栄三	VII Coloquio de la Sociedad de Literatura Española del Siglo XIX (S.L.E.S.XIX) “La Historia en la Literatura Española del Siglo XIX”	19
3. 和佐敦子	国際シンポジウム 「多面体日本、交差するアイデンティティの過去、現在、未来」	20
【国際シンポジウム案内】		21
【新刊案内】 (2013.6~2015.5)		22
【編集後記】		24

## 【巻頭言】

### イデオロギーとしての言語学

寺崎 英樹

昨年夏のこと、たまたま教育テレビでブラジルのピダハン語を取り上げた番組を見た（「ピダハン、謎の言語を操るアマゾンの民」、元は2012年オーストラリアで制作）。ピダハン人はアマゾン流域に住む先住民で、人口は二・三百人程度であるが、その言語（スペイン語ではel pirahan）は音韻、文法、語彙、どれをとってもこれまでの言語学の常識を破る点が多いので、注目を集めている。一例としてピダハン語には数詞がないと言われる。この言語が世界で知られるようになったのは米国人ダニエル・エヴェレットが研究を発表してからである。著書は邦訳も出ている（『ピダハン「言語本能」を超える文化と世界観』みすず、2012）。エヴェレットはプロテスタントの宣教師で、家族ぐるみ布教のためピダハン人の村に入った。もともと言語学の専門家ではないが、布教のために言語は不可欠だから、米国で生成文法を含む言語学の研修を受けた上で出かけた。しかし、現地で実際にピダハン語を習得するにつれ、自分の学んだ言語学の知識と合わないことが多いのに気付く、疑問を抱くようになる。さらにはピダハン人と接するうち、こんなに幸せそうに暮らしている人たちにキリスト教を布教することに意味があるだろうかとの疑問を持つようになり、ついには信仰を棄ててしまう。それが原因で離婚し、家族と離別するはめになった。エヴェレットは今は米国に住んでおり、ピダハンの村に戻ることを熱望しているが、ブラジル政府は認めない。その真の理由はよくわからない。

さて、番組で主要なテーマとなっていたのは言語の「繰り返し性」(recursion, 番組では「再帰」という不適切な訳になっていた)をめぐるとの問題である。チョムスキーによると人間言語を特徴づけるのは繰り返し性である。文を作る規則は繰り返し適用することができる。だから、やろうと思えば文は無限に拡張することが可能である。「太郎は家を持っていると二郎は言ったと三郎は聞いた…」のように。ところが、エヴェレットによるとピダハン語には繰り返し性がない。したがって、文の埋め込み構造はなく、複文は存在しない。エヴェレットがこのことを学会で発表すると、生成文法の原理の一つを否定するものだから大問題となった。米国から現地に調査団が派遣され、データの収集を行ったが、その分析結果はエヴェレットの主張を是とするものだった。しかし、生成文法派は認めない。この番組に登場したある生成文法学者は観察が間違っていると断言していた。チョムスキーも当然ながら同じ考えである。繰り返し性が否定されたからといって生成文法全体が覆るわけではないが、重要な理論体系の一角が崩れることにはなる。初めに理論があり、理論に合わないものは観察が間違っていると断言する学者の傲慢さ、番組を見ていて腹立たしささへ感じた。

実は、これこそ生成文法の本質を表すものである。生成文法はイデオロギーであって、科学ではないからである。と言うと驚く人もいるかも知れない。ここで言うイデオロギーとは検証不能の原理の上によって立つ世界観のことである。生成文法の公理と言うべきものは、人間の脳の中に生得的な普遍文法が備わっているというものだ。しかし、これは証明のしようがない。実証することは不可能である。この公理の上にどれだけ精緻な議論が組み立てられているとしても、砂上の楼閣なのである。ただし、生成文法による研究がすべて無意味だ

というわけではない。この理論による研究は特に統語論の分野で（というより生成文法にはほとんど統語論しかないのだが）大きな貢献があった。ただ、それは現実のデータに密着した研究の場合であって、理論的になればなるほど、学派外の者には価値のない空疎な「スコラ哲学」になってしまう。筆者はその種の研究を擬似言語学と呼ぶ。

米国は日本以上に画一主義的な国で、60年代以降生成文法でないと言語学界（米国で言語学とは英語学のこと）で生きられないような時代があった。そういう生成文法の全盛期はすでに去ったが、今でもチョムスキーの追随者は米国にも日本にも多数いる。チョムスキーは、政治的にはアナーキストを自称し、米国人でありながら米帝国主義を批判し、ユダヤ系でありながら反イスラエルである。そのために日本では言語学とは無縁な進歩派知識人の間にも熱烈な支持者が多い。そうした人たちは生成文法の根幹が英語中心主義、自国文化中心主義から成ることをご存知ないのだろう。現実を観察して理論と合わなければ、理論を疑ってみるのが学問の常道であろうが、イデオロギーは絶対である。あくまで教祖の立てた原理は正しいと信じ、それに合わない現実は疑い、否定までするのが演繹的言語理論の信徒たちの恐ろしいところである。

（てらさき・ひでき 東京外国語大学名誉教授）

## 【エッセイ 招聘の記録 1】

イグナシオ・ボスケ博士 講演

“Los diccionarios combinatorios y el concepto de colocación.  
Aspectos teóricos y aplicados”

福嶋 教隆

本学会は、2015年10月11～12日に大阪大学箕面キャンパスで開催された第60回大会に、マドリード・コンプルテンセ大学のイグナシオ・ボスケ (Ignacio Bosque) 博士と、高等科学研究院のフアナ・ヒル・フェルナンデス (Juana Gil Fernández) 博士を招いた。そして第1日にボスケ博士の記念講演を、第2日にヒル・フェルナンデス博士を中心とする言語・言語教育分科会ワークショップを実施した。以下では、ボスケ博士の講演の内容について簡単に紹介する。

ボスケ博士は1951年生まれ。1978年にマドリード自治大学で学位をとり、1984年よりマドリード・コンプルテンセ大学言語学部スペイン語学科教授、1997年よりスペイン王立学士院会員である。スペイン語文法及び語彙論に関する重要な著作を多数発表し、スペイン語学界をリードしている。文法の分野では、*Gramática descriptiva de la lengua española* (1999) をビオレタ・デモンテ (Violeta Demonte) 博士と共同で編んだことと、*Nueva gramática de la lengua española* (2009, スペイン王立学士院とスペイン語学士院連盟・編) の総合編集を担当したことが、特に大きな貢献である。1998年にも来日し、上智大学と神戸市外国語大学で講演を行った。

今回の本学会での講演では、「語の組み合わせの辞典とコロケーションの概念 一理論と応用一」と題する語彙論と文法の接点に関するテーマが選ばれた。コロケーションとは、rechazar と tajantemente のように、自然なつながりを持ち、共起しやすい語同士の関係を指

す。以下、講演の要旨を記す。

\*\*\*

- ① コロケーションを頻度の高い語同士の関係とみなすのは適當ではない。理由の第1は、頻度は言語外的要因（社会情勢など）に左右されることである。第2は、頻度は単に体系の反映に過ぎない場合があることである。第3は、頻度が低くても重要なコロケーションが存在することである。
- ② Hausmann (1985) はコロケーションを「ベース」(base, 主たる語) と「コロケータ」(colocativo, ベースに依存する語) から成ると考えた（訳は小池和良氏による）。これに従えば *rechazar tajantemente* の場合は、*rechazar* がベース、*tajantemente* がコロケータである。*tajantemente* は *rechazar* という行為の度合の強調という語彙機能 (función léxica) を果たしている。あるベースにどのようなコロケータが結びつくか、という視点の研究が多いが、コロケータ及び語彙機能から見た分析も必要である。例えば *hilo de lana* という語連鎖を、*lana* (ベース)、*hilo* (コロケータ) から成るものとみなし、後者を基点としてコロケーションを考えると、*hilo* は *lana* や *seda* のような直接的なベースと結びつくだけでなく、*agua*, *saliva*, 更には *esperanza*, *vida*, *voz* のような意味拡張的なベースともコロケーションを構成することが分かる。
- ③ 私はコロケーションの辞典を2つ編んだ。REDES. *Diccionario combinatorio del español contemporáneo* (2004) と *Diccionario combinatorio práctico del español contemporáneo* (2006) である。前者は研究者、教育者向けで、ベースとコロケータの意味的相互関係の説明を記載している。後者はスペイン語を第2言語として学ぶ学習者向けで、意味規則には立ち入らず、専らベースを基点としてコロケーションを成す語を列挙している。
- ④ 本講演で論じたことは次の5点である。第1に、コロケーションを頻度の高さだけで捉えてはならない。制限的、体系的な語彙のつながりと見るべきである。第2に、コロケーションの数は膨大であり、個別に暗記するよりも意味的基礎の理解につとめるべきである。第3に、コロケータを基点としたコロケーション研究には大きな可能性がある。第4に、コロケーションの辞書のうち、ベース基点のものは実用的、コロケータ基点のものは研究者向けである。第5に、語彙の研究者は、ある語と語の組み合わせがコロケーションか否かを判定し、文法の研究者は、それをもとに一般性を持った規則が立てられないかを考察する。このように、コロケーションは、語彙論と文法の接点に位置する概念である。

\*\*\*

この講演でボスケ博士は、スペイン語学研究者だけでなく、スペイン語圏の文学、文化、スペイン語教育の研究者にとっても有益なコロケーションという概念に焦点を当て、まず、陥り易い誤解への警鐘を鳴らした。次にベースではなくコロケータに基点を置いてコロケーションを捉えるという研究のヒントを我々に提供した。またコロケーション辞典の利用のしかたについて説明した。

我が国には、スペイン語のコロケーションの研究で国際的に知られ、優れた業績を発表している研究者がすでに存在する。今回の講演が刺激となって、この分野への関心が深まり、研究が一層進むことが期待される。

なお、ボスケ博士とヒル・フェルナンデス博士は今回の来日で、本学会以外に、神戸市外

国語大学（10月13日）と上智大学（10月16日）でも講演を行った。それぞれの題目は以下のとおりである。ボスケ博士：神戸では “La gramática como forma de vivir”，上智では “El análisis de las partículas desde la gramática y desde la lexicografía. Algunos ejemplos”。ヒル・フェルナンデス博士：神戸では “¿Cómo suena el español?”，上智では “Líneas actuales de investigación en fonética y fonología”。

（ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学教授）

## 【エッセイ 招聘の記録 2】

フアナ・ヒル・フェルナンデス博士

“Fundamentos fonéticos de la enseñanza de la pronunciación”

木村 琢也

福寫教隆教授による前記事にも記載されているとおり、2015年10月11（土）、12（日）の両日に大阪大学箕面キャンパスで開催された日本イスペニア学会第60回記念大会の最後のプログラムとして、12日11:40～12:40に言語分科会と言語教育分科会の合同ワークショップの形でスペイン高等科学研究院（Consejo Superior de Investigaciones Científicas, CSIC）のフアナ・ヒル・フェルナンデス（Juana Gil Fernández）博士の講演会が行われた。

ヒル博士は現在 CSIC の音声学実験室長であり、*Los sonidos del lenguaje*, 1990, Síntesis, *Fonética para profesores de español: de la teoría a la práctica*, 2007, Arco Libros などの重要な著作を發表されている他、近年では法音声学（fonética forense）の研究を精力的に行っている、スペインを代表する音声学者の一人である。

本学会の大会に海外から音声学者が招かれて講演をおこなったのは、福寫教隆教授のご指示によると1984年に東京外国語大学で開催された第30回大会にアントニオ・キリス（Antonio Quilis）博士を招聘して2本の講演をしていただいたとき以来30年ぶりだそうである。日本のスペイン語研究者・教師の世界でどことなく日陰者扱いされてきた感のある音声学が、このたびの第60回記念大会という晴れがましいステージに華々しく登場したことは、日ごろ細々とスペイン語音声学研究のまねごとをしている本稿の筆者にとって非常に喜ばしいことであった。また、大会出席者の多くがこの最後のプログラムまで帰らずに残り、熱心に聴講したことも、我が国のイスペニスタの間によく音声学への関心が浸透し始めたことを示すものであり、これまた大きな喜びであった。

さて、「発音教育の音声学的基礎」という題目が示す通り、今回の講演は聴講者の多くが日本人にスペイン語を教える教師であることを念頭に置いたもので、冒頭いきなり「すべての言語教師は好むと好まざるとにかかわらず音声学者である」という Abercrombie の言葉の引用から始まった。どんな学習者集団にどの言語を教える際にも、発音に一定の重要性を持たせることは不可欠であり、それゆえに教師は音声学の知識を持たなければならないというのがヒル博士の主張である。特に学習者の母語と目標言語（私たちの多くにとって前者は日本語、後者はスペイン語）の発音にどのような違いがあるかを熟知する必要性が強調された。

博士の講演内容は日西両言語の/u/の音色の違いから音節・強勢などの超分節的要素にまで

至る包括的なもので、そのうちのいくつかの点については具体的な教授法の提案がなされた。例えば ¿Has ido hoy a clase?を¿Há-si-do-ya-clá-se? と、Es el hermano de Enrique を E-se-ler-má-no-den-rí-que (表記は発表時のスライドのまま) と音節ごとに発音する練習などである。また発音教授の際の基本的留意点として、教師は学習者の発音の誤りを音声学用語を使って説明できなければならないこと、音の産出よりも知覚が先行すること、発音の誤りにも重大なものと軽微なものがあること、通常よりも大げさに発音してみせることが学習者の発音習得を助けること、話すことを教えることと発音を教えることは同じではないということ、発音は学習の最初期から毎回扱わなければならないこと、どんな教授法にも利用できる部分があるということ、超分節的要素は分節的要素と同じかまたはそれ以上に重要であること、発音矯正は学習者一人一人異なったものになること、学習者にプレッシャーを与えてはならないこと、以上 10 項目が挙げられた。日本のスペイン語教育現場に課せられたさまざまな制約を考えるとこれらすべてを実行することは困難だが、これらの諸点を念頭に置くことで、その場限りの発音矯正にとどまらない体系的な発音教育の可能性が開けることが期待できる。

今回の講演を聴講して印象的だったのは、その内容はもちろんのこと、メッセージを確実に聴衆に伝えようとするヒル博士の熱意と、それを成功させる講演技術であった。終始表情豊かに、聴きやすい声量と速度を保ち、常に聴衆の反応を確かめながら話を進めるやり方は、博士が音声学研究者としても教師としても最高の技量を有していることを示していた。当日タイムキーパー役を仰せついていた筆者に対し、博士は前もって「私はつい長くしゃべってしまうので、時間が足りなくなりそうだったら言ってくださいね」と話してくださっていたが、実際には予定通りの時刻に終了し、質疑応答の時間も十分に取ることができた。学会会場を温かい相互コミュニケーションの場に変容させた講演会は、ヒル博士の満面の笑みと聴衆の万雷の感謝の拍手をもって幕を閉じた。

(きむら・たくや 清泉女子大学教授)

### 【エッセイ 招聘の記録 3】

日本・スペイン・ラテンアメリカ学会 (CANELA) 第 27 回大会講演報告

丸田 千花子

CANELA 第 27 回大会は、2015 年 5 月 16 日・17 日に南山大学名古屋キャンパスにおいて、セルバンテス文化センター東京、在日チリ大使館の協賛を得て開催された。大会 2 日間では 4 つの分科会で 22 の口頭発表が行われ、活発な質疑応答が行われた。

国内外の研究者を迎えて行う大会記念講演は通常 2 講演だが、今回は特別に 3 講演が行われた。初日最初の講演 “Corrección de errores de pronunciación para estudiantes japoneses de español como lengua extranjera” は、木村琢也氏 (清泉女子大学)、ヒセレ・フェルナンデス氏 (関西外国語大学)、マリア・フェルナンデス氏 (南山大学) によるものだった。講演では授業で収録した学生の発音データ紹介、音声と韻律の誤りの分析結果と矯正方法の提案がなされた。日頃の授業では発音矯正の必要性を認識しているものの手が回らずにいるため、

発表者から今回の研究結果をもとに発音や韻律の習得に配慮した教科書を作成予定であると聞き、その出版を待ち望んでいる。

同日午後には、チリ出身のラテンアメリカ文学研究者ロベルト・カスティージョ＝サンドバル氏（米国、ハーバード大学）による講演“Chinos, japoneses, mexicanos: la presencia de Asia en el imaginario de la Nueva España”も行われた。講演では Catarina de San Juan (“China poblana”) の伝記 (1692) とマルセーロ・デ・リバデネイラの *Historia de las islas archipiélago y reynos de la Gran China, Tartaria, Cuchinchina, Malaca, Sian, Camboxa y Iappon* (1601) との比較からみられるアジアやアジア人の表象の相違点が指摘された。カスティージョ氏によると、Catarina の伝記では、17 世紀メキシコ社会における地位に連動して、アジア系住民は謙虚で卑しい人々として描かれているが、それとは対照的にインドからメキシコに捕虜として連れてこられ、後に修道女として宗教活動に携わった Catarina は人気も信望もある人物として提示されている。一方、リバデネイラの手紙では、アジアで布教活動を行ったフランシスコ会宣教師たち—長崎の「日本二十六聖人」の一人 San Felipe de Jesús も含まれる—が目にした日本、中国、東南アジアの人々の様子が紹介されている。結論として両書はアジアやアジア系住民のイメージを多様な形で、当時の新大陸社会に示すと同時に、19 世紀以降メキシコにおけるアジア系住民の国民性に係る議論に一役買ったことが指摘された。両書に関する研究が決して多くない中、植民地時代の文学を専門とするカスティージョ氏による「新大陸におけるアジアの表象」についての考察を拝聴できたのは貴重な機会だった。

2 日目の講演“Roberto Bolaño y su generación”は、評論家・ジャーナリストのロドリゴ・ピント氏（チリ、エル・メルクリオ紙）によるものだった。講演では、ボラーニョ、そして彼と深い親交のあった同世代の作家グループ—具体的には 1949 年から 1950 年代に生まれたセサル・アイラ、カルメン・ボウジョーサ、フアン・ビジョーロ、オラシオ・カステジャーノス＝モヤ、ロドリゴ・レイ＝ロサーの作品と特徴が紹介された。ピント氏によると、ボラーニョがインタビューやコラムで紹介したこの作家たちは出身国こそ異なるものの、多かれ少なかれ青春時代に独裁や内戦を経験し、ラテンアメリカのアイデンティティ、またその指標としての「暴力」を作品のテーマとした。また彼らは「マッコンド」やメキシコの「クラック」の作家たちに比べると出版界に登場するのが遅かったこともあり、当初その存在は目立ったものではなかったという。しかし政変や内戦によるキャリアの中断や出版業界の変革に翻弄されながらも、常に上質で傑出した作品を発表し続けている彼らをピント氏は高く評価している。この講演により、ポスト・ブーム世代の中での、ボラーニョを中心とした「1950 年世代」、または「ボラーニョ世代」とも呼ばれる作家たちの作品の重要性を再認識した。ボラーニョの邦訳が立て続けに出版されているのはうれしいかぎりだが、このグループの中でボウジョーサやビジョーロの邦訳がないのは残念である。

最後に大会報告とは別に CANELA の新しい活動を報告したい。1988 年の学会設立以来、CANELA は 3 部会—Literatura (文学), Pensamiento e Historia (思想・歴史), Metodología (スペイン語教授法)—で活動を続けてきたが、昨年からは新しい部会 Linguística (言語学) が加わった。また国際的な学会をめざし、今年からは海外からの会員登録を受け付けている。その数はまだ少ないが、本大会ではタイ、スペイン、米国、メキシコ、ペルー、コロンビアからの会員が発表を行った。各分科会で海外における研究動向も報告され、国内会員にとっ

て大きな刺激となった。さらに学会誌に **Open Journal System** を導入した。今後、国内外の会員、非会員からの投稿を広く募り、多様な研究成果を電子媒体でも発信していくことになる。また大会の他に年数回、各部会は講演会やワークショップを開催し、会員間の交流や研究推進のための場を設けている。6月には愛知県立大学や京都外国語大学にてスペイン語教授法部会や思想・歴史部会がワークショップや講演会を行った。引き続き秋にも講演会などが予定されている。詳しくは <http://www.canela.org.es/> を参照されたい。

(まるた・ちかこ 慶應義塾大学准教授)

## 【書評 1】

ベニート・ペレス＝ガルドス 『ドニャ・ペルフェクタ——完璧な婦人』  
(大楠栄三訳、現代企画室、2015年)

花方 寿行

残念ながら日本においては現在でも、スペイン語圏の19世紀文学の翻訳紹介は、今一つ遅れている。もちろん比較的コンスタントに新訳の出るベッケルや、まとまった紹介をされているマルティのような例外はあるが、全体としてはスペイン黄金世紀と98年・27年世代、そしていわゆる「ブーム」以降の20世紀後半の作品に比べて、なかなか翻訳出版に至らないのが現状だ。スペイン19世紀文学の巨匠ガルドスの場合も、『フォルトゥナータとハシント』など幾つかの代表作が邦訳されているとはいえ、バルザックやゾラ、あるいはディケンズに比肩する膨大な数の作品を残していることを考えると、まだまだ翻訳紹介でその全体像が掴めるにはほど遠い。

そうした中で、今回未訳だった代表作のもう一つ、『ドニャ・ペルフェクタ』の翻訳が出版されたのは、喜ばしい限りだ。大楠氏の訳文は極めて読みやすく、注を避けてできるだけ本文に説明を織り込んだり、登場人物が原文では様々に呼び替えられていることによって読者が混乱しないよう、ふりがなで名前を明示するといった処理が加えられていてもなお、違和感なく読み進められる。こうした処理は、翻訳が原文にできるだけ忠実であることを重視するひとは批判するかもしれないが、スペインや19世紀文学に不慣れな一般読者には親切だろう。これが功を奏してスペイン文学の読者層が広がることを期待したい。

旧態依然とした村にマドリッドからやって来たリベラルの青年が、一見友好的であるようにみえて執拗に裏で攻撃を仕掛けてくる保守的な叔母や村人たちと衝突するうちに悲劇に至るという展開は、ある意味本作を念頭に書かれたRómulo Gallegos, *Doña Bárbara* 以上に図式的かつ単純で、それが本作を「傾向小説」と見なす評価につながっている。大楠氏は「解説」において執筆前後の時代状況を踏まえて見事な反論を行っているが、ここでは少し違う切り口で「擁護」をしておきたい。本作における人物と政治的立場の完全な一致は、ガルドスの「限界」ではない。主人公らの示す進歩主義・自由主義も、叔母に代表される住民の保守主義も、なるほど心理主義的な見地からみれば図式的に維持される。しかしそもそも本作において重要なのは、登場人物の心理や人間的な変化ではない。地方社会における小さな個人的な対立が、自由主義的中央政府对保守的地方有力者の武力衝突という、社会の大きな動きにイデオロギーによって結びつく。その中で個人は政治を利用して家庭的な幸福や利益を得



ようと画策するが、結局は政情が妥協によって一応の安定を見るまでの短い混乱の中で踏み潰されてゆく。こうした個人のドラマと政治のうねりの連動が生み出すダイナミズムこそが、本作をはじめとするガルロス作品の魅力である。本作の登場人物たちが、他のガルロス作品に比べても頑なに変わらないとすれば、それは何よりも保守と革新という「2つのスペイン」の対立が頑強であり、本作で念頭に置かれていた19世紀のカルリスタ戦争前後から、内戦を経て現代に至るまで生き続けているほどだからだ。政治活動を目指したわけではないのに、政治的な異端者あるいは殉教者として殺される主人公ペペ・レイの最期が、ガルシア＝ロルカの死を予言しているかに思えるところこそ、ガルロスの「新しさ」をみてとることができるだろう。

(はながた・かずゆき 静岡大学教授)

## 【書評 2】

高垣敏博監修、菊田和佳子・二宮哲・西村君代編  
『スペイン語学概論』（くろしお出版、2015年）

和佐 敦子

本書は、高垣敏博教授の東京外国語大学退官を記念して編集された、スペイン語学の本格的な概説書である。スペイン語学研究の中で注目を集めているトピックを中心に、音声、形態、統語、意味、語用、語史、言語事情などの分野が網羅され、各分野の第一線の研究者が豊富な具体例を挙げながら、初学者でもわかるように解説している。

本書の構成と執筆者（敬称略）は以下の通りである。

- 第1章 音声学・音韻論（木村琢也）
- 第2章 形態論（西村君代）
- 第3章 冠詞（二宮 哲）
- 第4章 動詞の項構造と文の成り立ち（森本祐子）
- 第5章 時制とアスペクト（山村ひろみ）
- 第6章 動詞の叙法（福寫教隆）
- 第7章 再帰文と完了の se（Elena de Miguel、高垣敏博訳）
- 第8章 与格構文（松井健吾）
- 第9章 受動文（高垣敏博）
- 第10章 否定現象と統語論（片岡喜代子）
- 第11章 省略（高松英樹）
- 第12章 語順—情報構造の観点から—（結城健太郎）
- 第13章 意味論（大森洋子）
- 第14章 語用論（落合佐枝）
- 第15章 語史(1) 音韻変化（菊田和佳子）
- 第16章 語史(2) 形態・統語変化（鈴木恵美子）
- 第17章 語史(3) 文字の変遷（上田博人）
- 第18章 スペインの諸言語（川上茂信）

各章のはじめには、《本章で取り組むテーマ》が質問形式で示されており、問題意識を持ちつつ読み進めることができる。章末には、学んだ内容を確認できるよう複数の【課題】が設けられている。また、より深く学びたい読者のためには、【推薦図書】が内容の解説付きで紹介されている。

本書を通読すれば、スペイン語の特性を知ることができるだけでなく、他言語との相違点や類似点を客観的に捉えることができるようになるだろう。また、スペイン語学習者が自らの抱く疑問点を解決しようと本書を紐解けば、スペイン語学へのより深い探究心が生まれることだろう。スペイン語専攻をもつ大学におけるスペイン語学の授業のテキスト・参考書としても是非薦めたい書である。

(わさ・あつこ 関西外国語大学教授)

### 【書評 3】

マイケル・バイラム

『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』

(細川英雄監修 山田悦子・古村由美子訳、大修館書店、2015年)

四宮 瑞枝

「教育実践をより広いコンテキストで考え、自己の展望や教室実践を明確化ないし刷新したいと考えているすべての教師のために執筆した」と著者が序章で述べているように、スキルアップのノウハウなど外国語教育の「実用的な側面」ではなく、「価値観を揺さぶるような面」に学習者の目を向けさせたいと願っている教師にぜひとも読んでほしい一冊である。

著者のバイラム氏は、1980年代より一貫して言語教育と文化学習との関係に注目した研究を行い、欧州評議会言語教育政策部門特別顧問を長年務めた他、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)の社会文化能力に関する記述にも携わった。また、代表的著作 *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence* (1997) において外国語学習者の相互文化的コミュニケーション能力(Intercultural Communicative Competence: ICC)の5要素(態度、知識、解釈と関連付けのスキル、発見と相互交流のスキル、政治教育とクリティカルな文化意識)をモデル化したことで世界的に知られている。

本書は、第I部外国語教育、第II部相互文化的市民性教育の2部構成になっている。監修者細川氏の言葉を借りれば、「言語の機能とその使い方だけに注目してきた言語教育の時代は終わり、文化を含め、市民性形成、社会参加などの広い枠組みで言語教育をとらえ直し、言語教育の目的について問い直す時代が来ている」というのが本著の主張であり、全編を通じて「言語教育は社会的・政治的な活動である」ということがテーマとして貫かれている。言語教育が「政治的な活動である」と聞いて驚く読者もいるかもしれないが、これは、言語教育は、言語を学習したり使用したりする人のアイデンティティやその一生に強い影響を及ぼし、学習者個人のみならずその社会全体に関わるものであるという考えに依る。「知識を増やす」「視野を広める」「様々な人々と意思疎通を図る」といった表層的なレベルではなく、共通点や差異に気づかせ、各人の態度や行動に変化をもたらすようにする、新しい意識で社会

とのつながりを作る市民を育てるといったことが、言語教育に携わる者の責務なのであり、それが「政治的」という言葉に込められていると言えよう。

著者は「市民性、社会化、アイデンティティ、クリティカルな文化意識」などをキーワードに、幾つもの事例や主張を紹介して、丁寧に「社会的・政治的」であることの意味を明らかにしていく。二文化併用であることと相互文化的に行動することの違い、社会化と社会アイデンティティの関係、国民アイデンティティと国際人アイデンティティの住み分けと共存などについての考察は特に興味深い。

最後に、CEFR の言語能力と同様に、相互文化的能力を等級表で表せるかという問題に触れ、アセスメントと評価の考え方、ポートフォリオと「相互文化的出会いについての自分誌」などが紹介されている。

著者が一時期、東京学芸大学の招きで日本に滞在していたことや愛弟子である Parmenter 氏が早稲田の教員であったことなどから、本著には日本人学習者および日本の外国語教育に関する事例が数多く登場する。ヨーロッパ世界とは異なる日本の状況が興味深い材料と刺激を著者に与えたことが察せられるが、我々日本人読者には解り易く有り難い。

☆原著は *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections* (Multilingual Matters, 2008) である。“intercultural” は「異文化(間)の」と訳されることが一般的であるが、“intercultural” には本来「異」の意味は存在しないという監修者細川氏の問題意識を受けて本著では一貫して「相互文化的」という用語が用いられているので、新刊案内もそれに従った。

(しのみや・みづえ 早稲田大学講師)

#### 【書評 4】

ロベルト・ボラーニョ『アメリカ大陸のナチ文学』（野谷文昭訳、白水社、2015年）

高際 裕哉

本作品は、Roberto Bolaño, *La literatura nazi en América* (Barcelona: Seix Barral, 1996) の全訳である。白水社のボラーニョ・コレクションの全8巻のうちの4巻目であり、同じく白水社のエクス・リブリス・シリーズに収められた長編小説『野生の探偵たち』（柳原孝敦・松本健二訳）、『2666』（野谷文昭、内田兆史、久野量一訳）と併せるとボラーニョの翻訳作品としては6作目にあたる。今日の日本の海外文学翻訳市場において、ボラーニョの快挙はいまだに続いている。

この作品全体を貫く、ファシストたち、ナチスに傾倒する者たち、あるいは全体主義と親和性を抱かざるを得なかった者たちといったモチーフは、いわゆる「ラテンアメリカ文学のブーム」世代に属するリベラルあるいは左翼作家に対する強烈なアンチテーゼと言っても過言ではないだろう。現実世界においてイスパノアメリカがどのような形であれかつて受けたその傷が未だ癒えていないことは強調しておきたいところだが、文学の世界において、「ラテンアメリカ文学のブーム」の後続世代が背負ってしまった荷は重いことは想像に難くない。

その上、両世界大戦を経験しなかっただけで、欧米では断絶したことになっているファシ

ズムに傾倒した体制を生み出しもし、元ナチスの一員を軍部顧問に招き入れたことなどがまことしやかに語られる土壌もある。

だからボラーニョはその重い問題を真正面に受け止めることなくずらして書いた。左翼でもリベラルでもなく、それとは正反対の、オーソドックスな文学史からは政治的な理由か、文学的な理由で無視されたような人物たちを造形することで。

この作品に出てくる登場人物たちは30名に及ぶ。キャラクターの造形はいずれも個性的で、いかにもいそうな人物、ある人物へのオマージュと思われる人物、ボラーニョ自身が創造した奇妙な人物などの一生が文学事典の体裁で描かれる。

作品内では登場人物たちの口を借り、実在した詩人たちを罵倒する箇所が散見される。そこから文学のカノンを解体したり崇拜したりするまでもなく、罵倒する自由も読者は持っていることが確認できる。文学とは情熱であり、絶対的自由のことだ、とボラーニョが伝えているかのようでもある。

ブラジルの、西洋の形而上学的伝統にことごとく支離滅裂な形で反駁し、それを転倒させようとすることに猛烈な情熱を注ぎ、数えきれない著作を残したブラジルのルイス・フォンテーヌ・ダ・サウザの著作の背表紙たちは実際に目にしてみたい欲望に駆られる。手に取りたくはない。

アルゼンチンの特権階級である「メンディールセ家の人々」の部は、アルゼンチン文学への接近を試みる筆者にとって笑いを禁じ得なかった。同国の近代史を忠実になぞりつつ、そこに巧妙かつ奇妙な挿話を造形しているからだ。とりわけ印象に残ったのはルス・メンディールセ＝トンプソンの章だ。1928年、ベルリンに生まれた彼女は、赤ん坊の頃ヒトラーとの記念写真を撮る。その写真が彼女の一生を運命づける。酒とドラッグに溺れながらもアルゼンチン詩壇最右翼の女帝と化した彼女は、左翼の闘士の詩人志望の少女に恋をするが、少女は1976年のクーデターで虐殺され、それを知ったルス・メンディールセも愛車のアルファ・ロメオでガソリンスタンドに突っ込んで大爆発を起こし、命を落とす。

軍政により働かれた暴力は批判され、明らかにされなければならないことは言うまでもない。しかし暴力が働いているさなかにも人々の生活があり、構造的暴力は構造的に働くのみならず、想像の範疇を越えた無数の悲劇的な挿話を生み出すことを改めて感じさせる。これはフィクションが持つ力に他ならない。

このほかにも、この作品ではヨーロッパからラテンアメリカ、北アメリカのマイナー詩人たちの一生が、ボラーニョの純文学、マイナー文学、B級映画、ポピュラー・カルチャーに関する博識をこれでもかと注ぎ込んで造形されている。また文学事典の体裁を取るからには、各人物の一生の描写はそぎ落とされていなければならない。ソリッドかつ効果的なディテールを用いながら、その時代、人物の行動や思想、書かれもしなかった詩編などを想像する喜びを、マイナー詩人を自認していたボラーニョは読者に伝えてくれる。また、読んでいると、登場人物たちがいる欧米や中南米のある場所やある時代の雰囲気や濃密に感じられるのだ。これもボラーニョの筆力によるものだろう。

三分の一は虚構の文学事典として、三分の一は反・正統文学事典として、三分の一は奇特にしる凡庸にしる魅力的な人物たちの一生を描いた短編小説として読める。言うまでもなく、この作品は悪への傾倒を持つ私たちの謎を描いてもいる。その悪とどう向き合うのか考えさせられつつも、魅力に満ち、かつ文学に携わるものには文学を信じる勇気を与えてくれる特

異なる傑作である。

(たかぎわ・ゆうや 東京外国語大学大学院博士後期課程)

## 【書評 5】

田尻陽一監修『現代スペイン演劇選集』I、II (カモミール社、2014、2015年)

柳原 孝敦

同名のアンソロジー、すなわち佐竹謙一編訳『現代スペイン演劇選集』(水声社、1994)が上梓されたのは、もう20年ばかり前のことになる。佐竹編訳版はミゲール・ミウラ、アントニオ・ブエロ・バリェホ、アルフォンソ・サストレの3巨頭がフランコ時代に発表した代表的作品を扱ったものだった。副題には「フランコ時代にみる新しいスペイン演劇の試み」と謳っていた。

佐竹版の3人の劇作家のうち、一番若いサストレは重複して採録されているが、さすがに今回の田尻監修版に名を連ねる劇作家の顔ぶれは確実にもっと若くなっている。フェルナンド・フェルナン・ゴメスは、例外的にサストレよりも年上だけれども。これはIIIまでが予定されているアンソロジーで、IIに収められたファン・マヨルガやエルビラ・リンドは1960年代の生まれだし、III巻には70年代生まれの劇作家たちの作品も採録する予定のようだ。

ただし、このアンソロジーは作家の年齢順の配置になっているのではない。作品の発表順だ。Iは1977年から1990年までの作品、IIが1998年から2009年までの作品を収録している。さらに、IIIには、さすがに若い作家を並べているだけあって、2010年代の作品が採録される予定のようだ。佐竹版以後の時代をおさらいし、現代、いや現在に追いつこうとする野心的なプロジェクトだ。

Iの構成は発表年代順とはいえ、キャッチーだ。『自転車は夏のために』に始まりホセ・サンチス・シニステラ『歌姫カルメーラ』に終わるからだ(厳密に言うと、同じ作者の短いテキストが掉尾)。前者は俳優としてかなりの数の映画に出演したフェルナンド・フェルナン・ゴメスの劇作家としての代表作だし、後者はカルロス・サウラの映画化作品でも知られている。フェルナン・ゴメスやサウラに関係するとあれば、スペインの劇場に通い詰めるほどのスペイン演劇マニア(もしくは専門家)でなくとも、興味を抱く人はいるだろう。そういう意味でキャッチーだと言うのだ。

そしてまたこの2作品は、スペイン内戦の時代を扱ったものであり、その点でもキャッチーと言ってよかろう(いささか不謹慎かもしれないが)。内戦によってスペイン人たちが負った心の傷は計り知れず、それを見つめるフィクション(小説や映画)は今も絶えることがない。近年ではベニト・サンブラノの映画『スリーピング・ボイス』(およびドゥルセ・チャコンによる原作小説)が印象深い。何より現在NHKで放送中のTVドラマ『情熱のシーラ』(これも原作小説がある。マリーア・ドゥエニャス作)も内戦に関係する。時代背景を共有する戯曲が数多くあっても不思議ではない。

だがもちろん、内戦ものの戯曲ばかり集めたのではない。ホセ・ルイス・アロンソ・デ・サントス「一晩の出会い」などはピーター・イェーツの映画『ジョンとメリー』(アメリカ、1969)を想起させながら、どこかイヨネスコ風不条理劇の雰囲気も漂わせ、しかし、結局の

ところ苛立ちと愛のフラストレーションとが緋い交ぜになった乱暴な言葉の世界に生きる現代の若者以外の何者でもない男女を描出している。

II に収められたエルピラ・リンドなども、さすがに出色のでき。

私は2年ほど前まで東京外国語大学に勤務していた。そこでは秋の学園祭で学生たちがスペイン語による劇を上演していた。何しろ中心はまだ1、2年の学生たちだ。スペイン語の戯曲がスラスラと読めるわけではない。勢い、題材選びは邦訳のある作品などが中心となるわけだが、そうなると選択肢の少なさに悩むことになる。今ではもう教え子ではない学生たちのためにも、このアンソロジーの出現を言祝ごう。

(やなぎはら・たかあつ 東京大学准教授)

## 【書評 6】

フランシスコ・ウンブラル『用水路<sup>ニンプ</sup>の妖精たち』  
(坂田幸子訳、現代企画室、2014年)

西田 依麻

本書はフランシスコ・ウンブラル (1932-2007) の小説 *Las ninfas* の全訳である。日本語はもとより、外国語でこの作品が翻訳されることは今回が初めてだ。フランコ将軍死去の翌年である1976年の出版と同時に、独裁政権から解放されたスペイン民衆より多大な称賛を受けた。ナダール賞も受賞し、ウンブラルの名を一躍有名にさせた彼の代表作である。物語は、少年フランシスコが思春期の日々を経て大人となっていく姿を描いている。作者自身が少年時代を過ごしたバリアドリッドとそこでの経験が多分に投影されている小説だ。

タイトルについて触れておこう。時には辛辣に、時には歯に衣着せぬ物言いと後にエル・パイス紙にコラムを執筆することとなるウンブラルの小説タイトルとして、*Las ninfas* (妖精たち) は、その言葉のもつ幻想的な印象ゆえ違和感を覚えずにはいられない。一方邦訳のタイトルは『用水路の妖精たち』となっている。「用水路」と「妖精たち」もなんだか組み合わせとしてはしっくりこない。もちろんこれは翻訳者の造語ではなく、作者が主人公の口を借りて使った言葉であり (22頁)、それが邦題のために使用されたのだと考えられる。皮肉や諧謔といったウンブラルの文筆スタイルならではの言語形象と理解できよう。そしてこの「用水路」も「妖精たち」もこの小説にとっては支柱をなしている。

主人公は、薄暗く湿り気の多い地下室で複写機を操る勤労少年である。彼はまた、労働に励む傍ら「間断なく崇高であらねばならぬ」というボードレールの言葉を片時も忘れず、精神性世界の中に生きようと文学に没入する少年でもある。自己のアイデンティティーといった、ひとり人間が思春期に抱くであろうこのような悩みに加え、少年フランシスコには解決できぬもう一つの苦しみがあった。それは性への目覚めと共に彼に襲い続ける。「ぼくは何年も、じつに何年も、便所で過ごした。」(21頁) ここでいう苦しみとは、つまり、自らの身体に触れることで得られる快楽への欲に対し、崇高でありたいとする精神主義が脆くも崩壊することに由来する。頭で思い描く理想郷の主人公たる自分と現実世界の自分との乖離が苦悩を生むのだ。そこでこの小説の作者は、少年フランシスコに救いの手を差し伸べる。それ

が用水路だ。彼の裸体を凍らせんとばかりに冷え切っている用水路への入水は、清めの儀式そのものであり、茶色く汚濁したその水は、教会にある聖水盤のそれよりもはるかに清らさを帯びている。さらに作者はこの他にも彼への救済を用意した。「町内の三大悪の妖精(ニンフ)」（165頁）と主人公が名づけた少女の一人、魚屋の娘マリア・アントニエッタとの初恋だ。思いがけない彼女からのキスから始まった恋は、女性という異性の存在をフランシスコの日常世界に引き込み、自らを化け物とみなす彼を嫌悪感と罪の意識から放免することに成功した。

前述の通り、本書では思春期にある少年が大人になっていく様子が描かれている。当然のことながら、現実世界も含め、思春期から大人への道のりは人それぞれ異なるものであろうが、この作品の場合、作者ウンブラルは、少年フランシスコに極めて独特な個性を放つ多くの者たちと関わりを持たせ、大人へと成長する過程を踏ませている。読者は新しい登場人物の名を目にする度に、その新たな人物が少年の人間形成にどのような機能を果たすのかと想いを馳せるであろう。もちろん“妖精たち”もそれぞれ色彩豊かな羽を広げて飛び回り大活躍だ。最後に、この小説が一少年の青春物語を扱うだけの散文作品にとどまっていないという点についても言及しておこう。主人公と彼を囲む魅惑的な人物たちを隠れ蓑にするかのように、作者はそれまでに温めてきたであろう社会の様々な諸相に対する論を作品中に散りばめている。宗教や聖職者、ロマを取り巻くスペイン社会などの考察が、ウンブラル独特のプリズムを通し、決して直截的ではない表現技法で提示されているのだ。本書におけるもうひとつの魅力と言えよう。

（にしだ・えま 神奈川大学助教）

## 【書評 7】

ホルヘ・ボルピ『クリングゾールをさがして』

（安藤哲行訳、河出書房新社、2015年）

斎藤 文子

今から十数年前、メキシコの「クラック世代」がラテンアメリカ文学界で話題になったことがあった。このグループの名前を広く世に知らしめるきっかけになったのが、ブレベ叢書賞を受賞した Jorge Volpi (1968-) の *En busca del Klingsor* (1999) である。このたびこの傑作長編小説が安藤哲行氏によって翻訳された。

小説の背景となるのは第2次世界大戦前後のアメリカ合衆国とドイツである。主人公のペーコンは米国人、アインシュタインがいるプリンストン高等研究所の若き物理学研究者だったが、ある事件のせいで研究所を追い出され、軍の戦略事務局で働くことになる。終戦後、占領ドイツにおける連合軍のもとで仕事をしているときに、軍諜報部から秘密の任務を請け負う。ヒトラーの科学顧問として大きな影響力をもっていたクリングゾールを探し出せ、というものだ。クリングゾールとはワグナーのオペラに登場する悪の魔法使いの名前で、暗号名として使われていたらしい。そこに、調査の協力者としてこの物語のもうひとりの主人公、ドイツ人のリンクスが現れる。かつてヒトラー暗殺未遂事件に関わった人物だが、その後の大粛清を運よく生き延び、ライプツィヒ大学で数学の教授になっていた。2人は手掛かりを求

め、ナチス時代にドイツの大学で研究していたことがある物理学者に目星をつけ、会いに行く。面談の相手は、マックス・プランク、ヨハネス・シュタルク、マックス・フォン・ラウエ、ヴェルナー・ハイゼンベルグ、エルヴィン・シュレーディンガー、ニールス・ボーア。全員がノーベル物理学賞受賞者、量子力学の発展に寄与した科学界の大物である。このなかには、ユダヤ人迫害を逃れてドイツを脱出した者、反ユダヤ主義の「ドイツ物理学」を提唱した者、ナチスの核開発計画に協力した者、そして学問上のライバル同士もいて、それぞれはっきり言えない何かを抱えているため、調査は難航する。はたしてクリングゾールを見つけることはできるのか。

謎の人物探しと並行して、リンクスのスキャンダラスな過去がフラッシュバックで挿入され、ベーコンにできた新しい恋人との関係も進展する。不確定性原理や相対性理論に関する議論があるかと思えば、科学者たちが戦時中に直面せざるをえなかった政治と科学の問題も浮き彫りにされ、いくつもの異なるレベルのストーリーが絡み合って物語は重層的に進行する。しかもこの物語の語り手であるリンクスが、じつは裏切り者であることが判明し、謎解きはいつそう混迷する。誰が嘘をつき、誰が誰を裏切っているのか。語り手自身が自分は信用ならない人物だと言うこの物語は、いったいどこに行き着くのか。

1996年に「クラック宣言」を発表したメキシコの若い作家たちは、祖国やラテンアメリカの歴史の呪縛と決別しようというはっきりした意思を示した。20世紀前半のドイツと米国の科学者たち（実在の科学者とフィクションの人物が入り交じる）のスリリングな駆け引きを追い、「真実」とは何か、「悪」とは何かを問うこの小説にとって、もはや作者の出身国や出身地域は関わりがない。巻末の参考文献表には、小説に登場する科学者の評伝や自叙伝、物理学の解説書が多数挙げられており（なかでもホフスタッターの奇書『ゲーデル、エッシャー、バッハ』に刺激を受けてこの本は生まれた）、これだけでも作者ボルピの関心がどこにあるかは一目瞭然である。

日本語訳で2段組、488ページの長編だが、サスペンスがいくつも仕掛けられているので、最後まで読まずにはいられない。巻末の著者注は、初版にはなかった部分も訳出されている。注も飛ばさずに読むことをお勧めしたい。

この本が発表されて話題になっていたころ、ゼミで大学院生数名と原書を読んだ。あまりに面白かったので、そのうちの一人は、修論でコルタサルを扱うつもりが、この小説について書いてしまった。なんとも魅力的な小説が日本語で読めるようになったことを喜びたい。

（さいとう・あやこ 東京大学教授）

## 【書評 8】

岡本淳子『現代スペインの劇作家 アンтониオ・ブエロ・バリエホ  
—独裁政権下の劇作と抵抗』（大阪大学出版会、2014年）

田尻 陽一

スペイン演劇を専攻する者にとって、嬉しい本が出版された。一人の劇作家について、翻訳ではなく日本人の手による研究書が出たのだ。博士論文を大幅に修正加筆したとはいえ、論文提出から7年かけてまとめあげた労作である。



1976年、フランコの亡くなった1年後、スペイン演劇界の変化を見ようと思い、ベナベンテ劇場に向かった。フランコ体制下では上演禁止になっていたブエロ・バリェホの『バルミー医師の二つの物語』を見るためである。警察の取り調べにおける拷問がテーマだ。ボクの学生時代には秘密警察がいっぱいたのだから、拷問というテーマだけで上演禁止になって当たり前だ、見終わったあとの感想だ。警察の政治部に務めている夫が拷問による取り調べをしている。しかし、妻は知らない。どういうふうに妻が事実を知るか、この逆転が劇的要素であり、どのように幕を下ろすかが作者の思想だ。逆転の仕組みはうまい。さすが、ブエロ・バリェホだと思ったが、事実を知って精神異常をきたした妻が夫を殺すというのは、ちょっと弱いな、これも見終わったあとの素直な感想だ。この僕の疑問を岡本さんは「(ほとんど)すべての登場人物のナラティブを書きとめる人物、言うなれば信頼すべき作者としてのバルミーという人物を置く。ところが、ブエロ・バリェホはそのバルミーの言説を真っ向から否定するブルジョアのカップルをバルミーの外側に置き、国家のイデオロギーで作品を囲む。その後、カップルをバルミーの言説のなかに取り込み、国家のイデオロギーが隠蔽する事実を暴き出す」と説く。なるほど、と納得した。ということは、観劇後、ぼくが腑に落ちなかったのは、バルミーを脇舞台上で演じさせ、ほとんどの登場人物を本舞台上で演じさせたあまりにも安易な演出に問題があったのかもしれない。

岡本さんの研究視点は、ブエロ・バリェホの作品を権力、抵抗、記憶、歴史をキーワードとして分析するところにある。「勝者の歴史」ではなく、「敗者の歴史」の救済者としてブエロ・バリェホの姿を提示したいという。となると、疑問が生じる。国家権力を握った勝者の暴力である拷問は否定されても、妻の殺人は肯定できるのか、という問題だ。「(妻)の暴力は、法と密接に絡み合い決して罰せられることのない国家暴力の廃止に向けた、つまりは新しい歴史的時代を創出する抵抗の可能性を示している」と言われると、やはりここがこの戯曲の弱点ではないだろうかと思う。「暴力以外に方法がない場合、社会構造改善の手段として暴力行為もやむをえない」というのは、暴力革命の容認となる。となると、民主国家となったスペインでブエロ・バリェホの作品があまり上演されないのは、こういったところに問題があるのかもしれない。

ブエロ・バリェホのドラマトゥルギーを国家権力の暴力を暴くことに固定することで、残念なことにボクの好きな『ある階段の物語』が抜けて落ちてしまった。しかし、ある一つの視点から一人の劇作家の作品を一つ一つ分析していく研究態度は大いに評価すべきであろう。だれか若手で、バリェ＝イン克蘭、ガルシア・ロルカ、アレハンドロ・カソナ、ミゲル・ミウラ、アルフォンソ・サストレを研究する人は出てこないだろうか。

(たじり・よういち 関西外国語大学名誉教授)

## 【国際学会報告 1】

### ASELE 第 25 回大会

村上 陽子

2014 年 9 月 17 日から 20 日まで、スペインのマドリード・カルロス三世大学ヘタフェ・キャンパスにて ASELE (Asociación para la Enseñanza del Español como Lengua Extranjera) の第 25 回大会が開催された。

ASELE の公式ホームページ (<http://www.aselered.org/>) によると、世界中で高まりつつあったスペイン語とその文化への興味にこたえるべく 1987 年に設立された学会であり、外国語あるいは第二言語としてのスペイン語教育に携わる教師、学生など約 50 カ国から 800 人を超える会員を持つ。1989 年から毎年国際学会が開催され、大会ごとの会議録のほかに、Boletín de ASELE という紀要を年 2 回発行し、会員に投稿の場を提供している。また、スペイン語教育に関する卒業論文、修士論文、博士論文を対象とした研究賞を毎年授与し、研究賞を受賞した研究論文を出版している。

第 25 回大会のテーマは「学生を中心に据えた外国語としてのスペイン語教育 (Enseñanza de ELE centrada en el alumno)」であり、発表は以下のようなサブテーマに沿った内容で行われた。

1. Variables individuales en el aprendizaje.
  - 1.1. La dimensión afectiva en el aprendizaje de ELE.
  - 1.2. Estilos cognitivos y estrategias de aprendizaje.
  - 1.3. Inteligencias múltiples.
  - 1.4. Motivación.
  - 1.5. Actitud, aptitud y personalidad.
  - 1.6. Sexo y edad.
  - 1.7. Creencias sobre el proceso de aprendizaje.
2. Análisis de necesidades del alumnado y perspectiva lingüística.
  - 2.1. La adecuación de la enseñanza de ELE al perfil del alumnado a partir del análisis de necesidades.
  - 2.2. La lengua materna del estudiante de ELE: aspectos contrastivos, transferencias e interferencias.
  - 2.3. La lengua materna del profesor desde la perspectiva del alumnado. Profesorado nativo y no nativo.
  - 2.4. El conocimiento de otras lenguas por parte del estudiante: multicompetencia lingüística y aprendizaje de ELE.

三つの基調講演、二つのパネルディスカッションに加え、162 本もの研究発表およびワークショップが行われ、日本からも日本・スペイン語圏出身者あわせて 8 名が発表した。実際に発表会場に足を運び、様々な国籍の発表者たちからの報告を聞くことによって、それぞれの

地域におけるスペイン語教育の現状を垣間見ることができ、また、スペイン語教育に携わる者が抱える悩みは共通であることを実感した。特に印象に残ったのは、日本人にスペイン語を教えているスペイン人教員による日本人学生の学習に関する研究発表であったのだが、日本人学生にとっての学習言語を母語とするスペイン語話者の視点に立ったスペイン語と日本語の干渉に関する考察や日本人学生の学習行動に関する分析はひじょうに興味深く、具体的な示唆に富んでいた。また、スペイン語教育を専攻とする大学生たちによる音楽を使った教授法のワークショップでは、若者ならではの感性を生かした工夫をいろいろと教えてもらうことができた。

ほぼ毎年9月後半に開催されるため、大学などの授業開始と重なり、参加が難しいところが難点であるが、ひとつのテーマを様々なアプローチから深く理解し、教授法の具体的なヒントを得ることができる有意義な学会であると言える。

(むらかみ・ようこ 関西学院大学准教授)

## 【国際会議報告 2】

### VII Coloquio de la Sociedad de Literatura Española del Siglo XIX (S.L.E.S.XIX) “La Historia en la Literatura Española del Siglo XIX”

大楠 栄三

“coloquio”を学会と捉えていいものだろうか？ それも「19世紀スペイン文学」という狭い領域で、毎回バルセロナ大学で開催されるものを？ こうした疑問は残るが、昨年秋（10月22～24日）に開催された“Coloquio”について報告する。

「19世紀スペイン文学における歴史」というテーマにもとづき、16セッション（一部並行して進む）に分かれ、連日朝9：00から夜20：00あるいは21：00まで発表・総会が行われた（プログラム詳細については、<http://www.ub.edu/slesxix/coloquios.html>）。参加者は、主にスペイン本国からだが、他にフランス、アメリカ、ポルトガル、イタリア、日本（報告者のみ）。総勢40人ほどのこぢんまりした会である。

各セッションのテーマとしては、やはり、第一はペレス＝ガルドス。次に、パルド＝バサン。他、旅行小説、ロマン主義文学・演劇、新聞小説、歴史とイデオロギーといったものが続いた。高名な発表者としては、Baquero Escudero, Enrique Miralles, Stephen Miller, Hazel Gold, E. Penas Varela, M. Sotelo Vázquez, C. Patiño Eirín, B. Rodríguez Gutiérrez, E. Rubio Cremades, Laureano Bonet, S. García Castañeda（プログラム順）等。当日、参加者の都合により、いきなり二人のパルド＝バサン研究の大家、フランスのMaryellen Biederとサンティアゴ・デ・コンポステーラ大のJ. M. González Herránと同じセッションに入れられた報告者には、他の研究者から、「日本からの初めての参加者が、パルド＝バサンについてこの二人に並んで発表するとは……」と、同情の声が上がった。が、新会長となったGonzález Herránはとても気さくで、新入りに“Sabes leer muy bien a doña Emilia”と新刊の御著をくださった。

こうした雰囲気は、毎日大学近くのレストランで2時間かけて全員でランチ（会費に含まれる）を共にするゆえんだらう。最終日、3日間の発表・討議に疲労困憊した報告者を驚か

せたのは、閉会のパーティーが旧市街にたたずむ 1859 年創業の Hotel España で開催されたこと。モデルニスモ様式のサロンで飲んだカバの美味しかったこと（ちなみに、これも会費に含まれる）。

運営は現在、Marisa Sotelo Vázquez をリーダーとするチームが担っており、今回は、経済危機の影響で 4 年後、2018 年、テーマは“Literatura del Siglo XIX vista desde el S. XX”となった。

（おおぐす・えいぞう 明治大学教授）

### 【国際会議報告 3】

国際シンポジウム「多面体日本、交差するアイデンティティの過去、現在、未来」

和佐 敦子

2015 年 5 月 29 日から 31 日の 3 日間、東京外国語大学において「多面体日本、交差するアイデンティティの過去、現在、未来」と題する国際シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、スペイン語圏とポルトガル語圏の国々の言語文化を日本に広め、日本との文化的つながりを強化しようとするもので、世界の様々な地域から 30 名以上の研究者が参加した。

29 日はオープニングセレモニーが開かれ、計 24 カ国のポルトガル語・スペイン語圏諸国の大使館と機関から代表者・大使などが参加し、日本におけるスペイン語・ポルトガル語圏教育・研究の支援ネットワーク「Mundus Latinus in Japan」の創設声明が発表された。セレモニーの様子はダイジェスト版として <https://www.youtube.com/watch?v=zCdaBFs162Y> で公開されている。

30 日と 31 日は、ジョセフ A. レヴィー氏（ワシントン大学）の「過去と未来の言語：新たなミレニアムにおけるポルトガル語・スペイン語学習のさらなる重要性」と題する基調講演を皮切りに、3つのセッションに分かれて 30 の発表が行われた。日本からは、ロジェリオ・ゼデム氏（大阪大学）、アンジェロ・イシ氏（武蔵大学）、ベビオ・ヴィエイラ・アマーロ氏（東京大学）、中島楽章氏（九州大学）、住田育法氏（京都外国語大学）、宮田絵津子氏（立教大学）と筆者の 7 名が発表した。筆者は「多文化主義教育の課題と未来」のセッションで、わが国のスペイン語教育の歴史と発展について報告し、スペイン語授業において異文化学習を進めるためのいくつかの提案を行った。セッションには 2 日間とも多くの参加者があり、活発な意見交換が行われた。

また、同時開催として、「フランチェスコのサンティアゴ巡礼の道」（スペイン大使館提供）、「フェルナン・メンデス・ピントの旅」（ポルトガル大使館提供）と題する展覧会が催された。

このように大規模な国際シンポジウムを成功に導かれた東京外国語大学日西葡国際シンポジウム実行委員会の皆様に感謝と敬意を表したい。

（わさ・あつこ 関西外国語大学教授）



各国大使が並んだオープニングセレモニー  
(<http://tufstoday.com/articles/150520-2/>)

### 【国際シンポジウム案内】

Seminario Internacional "Dinámicas de contacto: español y lenguas amerindias"

21-23 de noviembre de 2015, Universidad de Tokio

El Seminario “Dinámicas de contacto: Español y lenguas amerindias” pretende ser un espacio de intercambio de ideas y conocimientos sobre el estudio del español hablado en América en situaciones de contacto con otras variedades o con diferentes lenguas amerindias como quechua, aimara, guaraní o lenguas mayas. El objeto de este encuentro será presentar y analizar descripciones de variedades de contacto o estudios de caso de fenómenos específicos de variación lingüística en español en situaciones de contacto, así como abordar nuevas líneas de investigación futura. Para ello se ha convocado a prestigiosos especialistas en dicho campo de estudio procedentes de varios países que expondrán sus investigaciones más recientes.

#### **Conferencia plenaria:**

Dr. Pedro Martín-Butragueño (El Colegio de México).

“Consideraciones para el estudio prosódico del contacto entre variedades lingüísticas”.

#### **Programa preliminar:**

La duración de las ponencias será de 30 minutos y se dedicarán 10 minutos a debate y preguntas.

Lenguas oficiales del congreso: español e inglés.

La asistencia al seminario será abierta al público interesado y sin costos.

#### **Colaboran:**

Top Global University Project, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology & Japan Society for the Promotion of Science

UTokyo Strategic Partnership Project (El Colegio de México)

UTokyo Latin American & Iberian Network for Academic Collaboration (LAINAC)

**Comité organizador:**

Ana Isabel García (Universidad de Tokio)

Mamoru Fujita (Universidad Keio)

<http://www.dinamicasdecontacto2015tokio.com>

**【新刊案内】**

2013年6月から2015年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。期間ごとに著者（の日本語表記）の五十音になっています。

2013年6月～12月

- カルロス・エステベス、カルロス・タイボ、大津真作訳『反グローバリゼーションの声』晃洋書房
- ファン・カルロス・オネッティ、寺尾隆吉訳『別れ』水声社
- G・ガルシア=マルケス、P・A・メンドーサ、木村榮一訳『グアバの香り』岩波書店
- アレハンドロ・サンブラ、松本健二訳『盆栽／木々の私生活』白水社
- 立石博高、奥野良知編著『カタルーニャを知るための50章』明石書店
- 寺尾隆吉編著『抵抗と亡命のスペイン語作家たち』洛北出版
- ロベルト・ボラーニョ、松本健二訳『売女の人殺し』白水社
- ホルヘ・ルイス・ボルヘス、木村榮一編訳『ボルヘス・エッセイ集』平凡社
- 松下直弘『やさしく読めるスペイン語の昔話』NHK出版
- エステバン・マルティン、アンドレウ・カランサ、木村裕美訳『ガウディの鍵』集英社
- ファン・ファリアス、堀越千秋イラスト、宇野和美訳『日ざかり村に戦争がくる』福音館書店
- 細田晴子『カザルスと国際政治』吉田書店
- 四方田犬彦『ルイス・ブニュエル』作品社

2014年1月～12月

- マシャード・ジ・アシス、武田千香訳『ドン・カズムッホ』光文社
- J・J・アルマス・マルセロ、大西亮訳『連邦区マドリッド』水声社
- ロベルト・アンブレロ、宮崎真紀訳『ネルーダ事件』早川書房
- イソール、宇野和美訳『うるわしのグリセルダひめ』エイアールディー
- イソール、宇野和美訳『かぞくのヒミツ』エイアールディー
- フランシスコ・ウンブラル『用水路の妖精たち』現代企画室
- ベルナト・エチェパレ、萩尾生、吉田浩美訳『バスク初文集』平凡社
- 岡本淳子『現代スペインの劇作家アントニオ・ブエロ・バリエホ』大阪大学出版会
- 落合一泰『トランスアトランティック物語』山川出版
- ギジェルモ・カブレラ・インファンテ『T T T トラのトリオのトラウマトロジー』現代企画室
- ガブリエル・ガルシア=マルケス、木村榮一訳『ぼくはスピーチをするために来たのではありません』新潮社

- ガルシア・マルケス、バルガス・ジョサ、寺尾隆吉訳『疎外と叛逆』水声社
- 木村榮一『謎解きガルシア=マルケス』新潮社
- ヨアン・グリロ、山本昭代訳『メキシコ麻薬戦争』現代企画室
- エウヘニオ・コセリウ、田中克彦訳『言語変化という問題』岩波書店
- フリオ・コルタサル、寺尾隆吉訳『八面体』水声社
- サマンタ・シュウェブリン、松本健二訳『口の中の小鳥たち』東宣出版
- 田澤耕『〈辞書屋〉列伝』中央公論新社
- 田尻陽一監修『現代スペイン演劇選集Ⅰ』カモミール社
- 寺尾智史『欧州周縁の言語マイノリティと東アジア』彩流社
- ホセ・ドノソ『別荘』現代企画室
- 野々山真輝帆編『ラテンアメリカ傑作短編集』彩流社
- イバン・バレネチェア、宇野和美訳『ボンバストゥス博士の世にも不思議な植物図鑑』西村書店
- オクタビオ・パス、阿波弓夫ほか訳『太陽の石』EHESC
- エドゥムンド・パス・ソルダン、服部綾乃、石川隆介訳『チューリングの妄想』現代企画室
- グスタボ・ファベロン=パトリアウ、高野雅司訳『古書収集家』水声社
- トニ・ヒル、宮崎真紀訳『死んだ人形たちの季節』集英社
- ロベルト・ボラーニョ、久野量一訳『鼻持ちならないガウチョ』白水社
- カルロス・ルイス・サフォン、木村裕美訳『天国の囚人』集英社

2015年1月～5月

- 青木利夫『20世紀メキシコにおける農村教育の社会史』溪水社
- ビセンテ・ウイドブロ、鼓宗訳『クレアシオニズムの詩学』関西大学出版部
- 佐々木孝著、碓順治編『スペイン文化入門』彩流社
- ハビエル・シエラ、宮崎真紀訳『最後の晩餐の暗号』イースト・プレス
- 田尻陽一監修『現代スペイン演劇選集Ⅱ』カモミール社
- マリーア・ドウエニャス、宮崎真紀監訳『情熱のシーラ 上』NHK出版  
(中、下巻は6月以降続刊)
- ダニエル・ネスケンス、ルシアーノ・ロサノ、宇野和美訳『だいじょうぶカバくん』講談社
- ベニート・ペレス=ガルドス、大楠栄三訳『ドニャ・ペルフェクタ』現代企画室
- ロベルト・ボラーニョ、野谷文昭訳『アメリカ大陸のナチ文学』白水社
- 松下直弘『続 やさしく読めるスペイン語の昔話』NHK出版
- グスタボ・マラホビッチ、宮崎真紀訳『ブエノスアイレスに消えた』早川書房
- ゴンサロ・ロハス、グレゴリー・サンブラーノ編、寺尾隆吉訳『ゴンサロ・ロハス詩集 (アンソロジー)』現代企画室

**【『HISPANICA』編集委員より】**

『HISPANICA』第60号の原稿を募集しています。

論文・研究ノート・書評を投稿規定に従い、2016年3月1日から31日のあいだにご投稿く

ださい。

(送付先)

日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1 第2ユニオンビル4F

(株)ガリレオ学会業務情報化センター内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

### 【編集後記】

新刊案内や書評で取り上げる本はどうしても翻訳が多くなる。そのこと自体は悲しいかもしれないが、嬉しくもある事実だ。近年、スペイン語圏の文学作品の翻訳が、ひとところに比べて活発になってきたことは、喜ぶべきことだろう。既にカノン化されてはいるものの翻訳が存在しなかった作品を、助成金を取るなどして出版する例と、新たに発掘され紹介される作品とが入り混じっている。

出版点数は多くなっても部数は少ないのがスペイン語圏からの翻訳作品の常だ。残念ながら、これらが重版されたり新訳版が出たりする可能性は低い。今出た本が唯一の決定版になる。翻訳を読んでスペイン語世界に触れ、没入していく後進の者たちもいるだろう。進行中の翻訳はそうした後の世代の審判に堪えうるものだろうか？ そう考えると身がすくむ。翻訳はオリジナルよりも早く古びるから、生半可な言葉遣いはできない。

昨年、日本翻訳大賞という賞が始まった。インターネットで寄附を募るクラウドファンディングで資金を調達し、委員が手弁当で運営する賞だ。予定額の3倍ばかりの資金があつという間に集まり、予想以上の盛況だった。受賞作品はチェコ語と韓国語からの翻訳作品。未来の審判だけではない。私たちが企画する翻訳は、現在においては、こうした期待を集める催しのようなものの審判に堪え、多言語からの翻訳作品と拮抗していかなければならないようだ。ますます身がすくむ。いや、身が引き締まる。

(広報担当理事 柳原孝敦)